

新潮文庫

厭がらせの年齢

丹羽文雄 著



新潮社

新潮文庫 17 A

昭和二十三年七月五日 発行
昭和四十四年十一月十五日 二十八刷

著 者 丹 羽 文 雄

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)二一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

厭がらせの年齢

丹 羽 文 雄 著

新 潮 社 版

目次

贅	肉		七
人生案内		四五	
南国抄		九七	
愛欲		一七二	
厭がらせの年齢		二六三	

解説 古谷綱武

厭がらせの年齢

贅

肉

紋七は動いている車内から歩廊の母の顔を簡単にひろったが、降りると自分が母の琴を迎いに近よっていった。琴は元氣のない顔をしていたが、それでも稍々おもてに出迎いの人らしい色をみせた。二タ言三言で半年あまり別れていた母と子が半年を越え昨日今日のような楽な気持ちを取りもどす普通な挨拶も、琴にはいかにも辛そうだった。琴は紋七の顔を迎えたので、待ちかまえていた自分を投げ出しにかかるのだ。相手の手のなかへはいってしまったえば、あとはどうにでもなるといった頼り方である。これまでこんな頼り方をされたことがなかったので、紋七はたじたとになり、母の蒼い顔から永田東作に対する母の情熱の燃えさかる勢いをどきりと感じた。琴はこれを十幾年続けているので、もはや見栄はなく、一途なたぎりようであった。陸橋の階段で母の手を取り、紋七の顔は、永田に対する母の容易でない気持が実感となり、あらわれるのを抑えかねた。のんきにかまえた顔附で母の前にあらわれては機嫌をそこねるだろうと、汽車のなかから氣にいりそうな顔をつくってきたが、おのずと琴の色に相応しい顔にこちらもなれた。

駅前に出ると、暮ちかい空に稻葉山が空半分に黒々と迫っていた。東京に住みなれた目には岐阜駅頭の風景がものものしく映るのだ、山上の金華城は小粒だがきりりと引きしまって見える。そのものものしさは事件の解決に岐阜へ来た、かまえた紋七の情緒によく合った。自動車の中で母の膝をかるく叩いて、おもてに或る表情を浮かべ、

「母さんが永田と喧嘩別れしたって云うのは、たしか一カ月前ね。その後、一度も逢ったことがないって、嘘？ こっそり逢ってるんじゃないかな」と訊いてみた。「逢ってない？ 一度もね。それじゃ母さんの方で逢おうとしなかったんだな」

頷いて、琴は慍ったような顔をした。母の強情は持前だったが、一カ月も永田に逢おうとせず人一倍血の気の多いからだを制してきた案外な頑張りには、こいつは出来過ぎだと濁らない心でそう思った。しかしとうとう負けになり、自分を電報で呼びよせたことを考えると、はつきりとした線をもつ横顔を眺めて、ひょいと老人のような微笑をうかべるのである。何もかも見透しが出来ていたのだと云った風な……。

そしてそういう見透しにしたがい紋七は今度の場合も、母と永田東作が和解してくれることを望んでいた。そのための東京からの汽車だった。

瓜実顔でふくみ綿をしているような下っぶくれで、眸が大きく、小柄なせいかな琴は三十をわずか越えた風にしか見えなかった。姉のようである。笑うと深いえくぼが出来、知らないひとは板の間をふんできた人柄に見立てた。十余年琴はまるで生活に複雑をもとめるように極く些細なことで永田東作と争いをしたり、すぐ和解してみたり、別れてしまふんだと周囲のものに火をつけたり、逆上して家をとび出すまでではないが、後から追いかけてくる永田を途中で待っているなどと、きまりの悪いことを平気でやってのける性質故、年齢の色が年相応に顔やからだを処理しかねるようであった。

琴と紋七はある事情から、永年生活が別個になっていたが、紋七はときどき自分のかげに琴のような生活者のいることで、ある場合には何か元気の湧く思いがあった。

数年前、紋七が永田東作に初対面したとき、母と子の位置が倒錯した光景があった。紋七は、「——教育もない、万事ゆきとどかぬ女ですが」と琴をそばに置いてそう云った。「すでにお聞きおよびのことと思いますが、この母は若いころから苦労づくめで、家庭的にはすこしも恵まれず、そのため家出までしているくらいです。言葉では云いきれない辛い目をみてきた可哀そうな女なのです……」

昂ぶった心持を顔にあらわして、今後は一切を任す故よろしく琴の面倒をみてくれるようにと頼んだ。そのとき琴も一しよに頭をさげたが、すでに八年間永田の世話をうけていた。

あとで二人になると、大変うまい挨拶だったと母に褒められ、紋七は臆病そうに笑った。が、その笑いは母の顔色に迎合しようとするために、自分を欺いている風でもあった。

金華山に向いた金神社の裏手に、琴の住みなれた二階家があった。静かな邸小路、時をきめて賑やかになる近くの小学校、芭蕉の葉と糸杉の巻きあがった葉のあいだに神殿の白木造りが仄見えた。えにしだ、藤のうえ込みになった中庭があり、庭に面した部屋はいろりがきられ、ほとんど一日ここにいた。冬のあいだは部屋の半分日向になり、日が翳るといろりの顔色もかわった。琴の裏千家は玄人の域にあった。いまもなお頼まれて四五人の娘に教えているが、琴は娘たちに向いているといつか友達になってしまふのだ。陽気な性質を誰に対してもまる出しなので、娘たちもこの茶の湯の師匠にはすぐ慣れた。そんな娘たちのなかで、琴はぐんぐん若く還っていくよ

うに見えた。その顔に漂う若やいだ明暗は借りものでなく、身についた感じがあり、——だから永田東作が心をつくす贅沢なくらいな衣食住にも、あまり深い心の状態で感謝していないようであつた。

紋七は母のもとにいるあいだ、日に一度いろりの前に坐らせられる。そのときの琴は我儘と贅沢になれた女でなく、奥行があり厳としていて、ひとりでに畏敬させた。そんな一面が嘘のように身に備っているが、さて朱塗の長烟管をくわえ心持ち膝をくずした姿勢になると、別人に見えるのだった。琴の喫煙は紋七の幼い記憶からつづいている。実際この母は平常なにもしないで烟管をくわえ、贅肉をつけていくのが一番よく似合っているようである。その傾向は最近に甚しくますます木偶の坊になっていくと思われた。——茶の湯で琴に独立を強いる、それは出来ることであつたが、はたしてそれにどれだけの値うちのあるものか、紋七はその効果を疑うのだ。琴はいま十代の娘のように永田東作でいっぱいになっている。四十二年のあらゆる季節のなかで一番よく似合う時節にある琴を、わざわざ過ごしにくい季節に落してしまうなど、不見識な限りであろう。さように紋七は己の心を寛大に持っていた。

最近琴に縁談がおこつた。相手は多額納税者の六十の隠居で、琴は茶の会で二三度あつてゐる。求婚される話は珍しくなく、三十代より四十になつてから度たびもち込まれた。今度も琴は一笑に附し、永田にも話さなかつたが、永田はよそで聞いてくると、自分にかくし立てしているだけ琴の心が動いているものと解し、責めた。この求婚はもし隠居が死ねば、隠居家屋と二万円をあたえるというのである。永田の五十男の情熱がその条件に気後れさせ、琴とのあいだに溝を

作った。それが琴の心をめちやめちやにして、相手のひと捻り二タ捻り裏返った心情を琴はそのまま冷淡と見なして、喧嘩別れをした。

容貌の点から云うと、紋七は琴とよく似ていたが、精神的には類似するものがなく対蹠的と云っていいくらいだった。しかし、紋七の弱点は、母に向えばいかなる場合にも自分を味方であるように見せかけずにはいられなく、意識無意識にかかわらず母の意に迎合しようとするのである。

——酒は富久娘、半年ぶりの母のお酌で紋七はだまって話をきいていた。食卓には若鮎のきのめ和えがあった。

「一カ月前の晩、母さんはあの人の誤解をとくためにとうとう泣いてしまったんだよ」

話をはじめから真剣な状態で聞きなされた。紋七は見まもり、母のこもごも抱く感情をいっさい汲みとった上でという顔をしていた。

「今度の縁談に母さんがだまっていたのはわるかった。でも、母さんは二万円も家作も相手にしなかった気持を汲んでもらいたかったんだよ。それを永田は、自分のことばかり喋って、やれうちの商売が近ごろ思わしくいかなので母さんに不自由させて置いたのがわるかったとか、永田の奥さんが亡くなったときいくら入籍をすすめられても母さんが応じなかったのは、こんなことの下心だったとか、むちゃくちゃ云って、ちっとも母さんの云い分は聞いてくれないんだよ。そんな法てないよ。入籍のことも、何故断ったか、あの人はよく承知してるんじゃないか……」

永田はこの不景気に家作と二万円は夢のような話故、ことわる女は馬鹿か気違いだ、是非承諾するようにと皮肉な顔でくどき立てたという。そのようすがいかにもこの際琴と手を切りたいと

望んでいるかのように見えたのだ。そう云って琴はふくらみの厚い髷をま上に、ぼんの凹を見せ顔を伏せるのだった。その目頭はすでにぬれているようであった。しかし、紋七が母を前にしてこうじりじりと不安をつのらせていくのは、一カ月のあいだ琴がひとりで苦しんできた分量を一つぺんに受けとろうとして、受けとめかねるせいのようにであった。

「場合によってはこの際ひと思いに別れてやろうかとも思ってるんだよ。自分ひとりのくらしなら、なに、目鼻はつくんだからね」

紋七は意味のない目を合わすのである。口をついて出る慰めの言葉はどれもみんな琴の真剣なことさら狭められている気持にはいっていかぬように思われ、また母の悲痛に近づくため出来るだけ悲しみを装おうとしてみるのだが、自分の目のとどく範囲より母のそれが遙かに深いので、何か手持ち無沙汰で、だまっている。だまって盃のふちを舐めている。琴は盃を置くと、薄い唇に烟管をくわえて考えこみ、口のなかでかちかちと金属性の音を立てるのである。濃い眉と小さな口許に或る気性をみせて、それで保っているだけに、痛々しい思いを誘われ、その圧迫にたえられない気が紋七はした。

昔の紋七は母と別れていたあいだが長いので、親狎もうすく、こうした場合を非人情に眺めてきたが、いまは琴と一しよに波に乗り、波をくぐるのだった。そしてこのどきどきする気持は、やがて相手の心のなかへしっくりと溶けこんでいけるよすがのように思われた。

「母さんは、紋七、今年で四十二になったよ。ほんとう云えば、もうあの人と別れられなくなっている。別れるのなら五六年昔だった。いま別れては、母さんのからだが不憫だよ」

母の心もここまでできているのか、と紋七は暗い庭のうえ込みに目をやった。この衰えも年齢のせいかと、琴のうちにひそみ聞えているものがまっ直ぐこちらへ響いてくるのだ。紋七はスグコの電報をうけとったとき、またかと、琴が永田東作を焦らしているようすを描き、それを東京から持ってきたくらいである。一カ月前、永田と仲たがいの報告されていたが、どうしても手のつけようがなく捨てて置いた。その後二通あったが、永田と別れていることがだんだん耐えがたくなっていくという文面でなく、普通であった。電報をみたときも、たえず勝気についてまわる性分の母がことさら紋七を利用するほど弱気になっているとは考えられなかった。しかし、母の二三通の手紙がいかに女らしく、いかにも優しく、困っているらしく、何とかして紋七を自分と永田東作の和解に利用しようとしたくろんでいるような種類であったなら、或は紋七の気持がすらすらととり出すことが出来たかも知れない。が、母ひとりで一カ月も苦しんできたということは、まるで紋七の焦燥の分まで代償していたかのようにも考えられ、——いや、これは嘘だ、万一そんな母を見せつけられたなら、紋七はますます困るだけかも知らないのだ。

琴の強い気性には、こんな例がある。

父親の云いつけで結婚した紋七は、上京の中途琴のいる岐阜へ細君を挨拶につれていった。出迎えた琴は一存で、長良川にちかい旅館へ案内した。

「母さんの家へ行きたかったのだ」と母を廊下へ呼び出して、それを云うと、

「厭なことだよ」

「見栄や遠慮なら、母さん、止した方がいいよ。母さんがいまどんな生活をしているか、あれに

はもう何もかも話してあるんだから」

「それじゃなおさら厭だよ」

いずれ琴が老年になれば引きとらねばならず、いまから妻と琴のあいだに溝を作るのを怖れてすこしでも双方を馴染ませて置こうと、是非琴の家で泊ってみたいと紋七はせがむのだった。それがあまり執拗かったのだろう、顔色を変えて琴はそのまま帰りかけた。

「母さん」と声を抑えて追いかけると、

「もういい」

長い廊下を歩き歩き向うを向いたまま、母は首を振った。そして長廊下を一度もふりかえらず帰っていった。母の自分本位な行動は他人のそれだと、まだ良人になじみかねている細君のそばで仰向けに寝ころがり、べそをかいた。琴は自分の気強さを、いつも一番完全な方法であらわすようであった。

その夜、二人は琴に挨拶せず上京したが、目白の家に落着いて二日目、追いかけてきて、コトキトクの電報だった。再びひとり八時間汽車にゆられて駈けつけると、琴は永田のひとり子である千鶴を相手にお茶をやっていて、迎えた顔は機嫌よかった。

「胃痙攣でね、一時はどうなることかと慌てたよ。でも、もうすっかりよくなったよ」

胃痙攣でなく、琴のは持病の胃弱である。紋七は「そう、そりゃよかった」と母の詞に添う答を云って、しばらく呼吸するのさえ普通でなかった。相手が母なので、感情は内に押しこめられ